

国語 2025 年度松商短期大学部 一般選抜 A 出題の意図

第1問は美馬達哉の論説文『〈病〉のスペクタクル』から、第2問は池田澄子の随筆『野暮と思われてもいい』から出題した。

第1問の出題文はがんという病気の特異性について述べたもの。嫌悪や差別の対象としてがんという言葉が用いられたため、がんには社会的にマイナスのイメージがつき、地域や時代による差はあるものの、人々ががんに対して抱き続けている恐怖心を指摘している。読み取りにあたっては十分な読解力と持続的な集中力が必要となる文章である。本問では、この文章の読解を通して、受験生の論理的・抽象的思考能力を多角的に評価することを狙いに、空欄補充問題、内容説明問題、内容合致問題などを出題した。

また、第2問の出題文は、戦病死した父をテーマに、亡き父への思いや母との思い出を綴った随筆。亡き父に対する作者の気持ちを押しやることはもちろん、死者が生きていたときのことを思い、死者が伝えなかったことに思いをはせるのは生きている者の役割であり、その人の存在に思いをはせるものがなくなった時こそが、死者が死ぬ時なのだという筆者の考えを的確に把握できているかを問うている。

出題にあたっては、書かれている内容を丹念に辿り読み取るだけでなく、表現の効果や表現に込められた作者の心情について考える問題など、文学的文章に特有の解釈力を見ることにウエイトを置いて出題を行っている。文章を正確にそして速く読む力は、一朝一夕には身につくものではないため、十分な準備をしているかをはかる意図で作成した。